

インドネシア、カリマンタンのラタン園

1. 地域の概況

インドネシア・東カリマタン州（ボルネオ島）の南、中央カリマンタンの州境に近いダマイ郡(35万 ha)には、19の村が存在し、ブヌア・ダヤクと呼ばれる人びとが暮らしている。彼らの生業は、陸稲を主作物とする焼畑農業、林産物採取、狩猟、河川漁労である。住民の生計にとって最も重要な林産物のひとつはラタン(籐)である。1970年代末ごろより、ラタンはこの地域の多くの村で主要な現金収入源となった。家具材などとして利用されるラタンは1980年代後半に、世界的な需要が高まり、天然ラタン資源の枯渇が危惧された。しかし、ダマイ郡を含め、カリマンタンでは、以前より(一説によると19世紀ごろから)陸稲栽培型焼畑とラタン栽培を組み合わせた土地利用が行われてきた。



図 ボルネオ島

2. ラタン（半）栽培の方法

ラタン（半）栽培の方法は地域や各農家によって異なるが、ダマイ郡のベシク村における Rambudh et al. [2004]の調査によると、概ね次のようなものである。農民は5月ごろ「原生林」もしくは二次林を伐採し、乾季の終わる8月ごろ、火入れを行う。そして、9月ごろ陸稲、トウモロコシ、キャッサバ、バナナなどを植える。またそれらの他に、sega (*Calamus caesius*)などのロタンの種、実生、野生個体も植えられる。ラタンの若い個体は焼畑耕作がおこなわれているあいだ保護される。その後、1~2年後に畑が放棄されると、二次植生の回復とともにロタンも成長しやがてラタン園となる。segaの場合、植栽後8年から10年後に収穫が可能となるという。



採取したラタンを運び出す村人
出典：Rambudh et al. 2004.

現在、カリマンタンでは産業造林やオイルパーム農園開発により、ラタン園が減りつつある。こうした動きを、1980年代末以来のラタンの価格低迷が促進している。しかし、産業造林地やオイルパーム農園が拡大するなかで、焼畑農耕-ラタン栽培の複合的土地利用は、地域住民の経済的要求を満たしつつ、生物多様性を相対的に高いレベルに保つ上で有効なシステムとして見直されてきている。

出典：Rambudh, F., Belcher, B., Levang, P., and Dewi, S. 2004. Rattan (*Calamus* spp.) gardens of Kalimantan: resilience and evolution in a managed non-timber forest product system. In (Kusters, K. and Belcher, B. eds.) Forest Products, Livelihoods and Conservation: Case Studies of Non-Timber Forest Product System Vol. 1.- Asia, pp. 337-354, CIFOR.